

# 古いはさみ

小川未明

青空文庫



どこのお家にも、古くから使い慣れた道具はあるものです。そしてそのわりあいにも、みんなからありがたがられていないものです。英ちゃんのおうちの古いはさみもやはりその一つでありましょう。

英ちゃんの、いちばん上のお姉さんが小さいときに、そのはさみで折り紙を切ったり、また、お人形の着物を造るために、赤い布や紫の布などを切るときに使いなされたのですから、考えてみるとずいぶん古くからあったものです。

その時分にはこんな黒い色でなく、ぴかぴか光っていました。そして刃もよくついていてうっかりすると、指さきを切ったのであります。

「よく気をつけて、おつかいなさい。おててを切りますよ。」と、お母さんが、よく、ご注意なされたのでした。

お姉さんは、おちついた性質で、お勉強もよくできた方ですから、めつたに、このはさみで指さきを切るようなことはしませんでした。使ってしまったら、箱の中に、ちゃんとしてしまっておきました。

お姉さんが、まだ十か十一のころです。ある日のこと、

「あれ、なあに。」と、ふいにお母さんにききました。

「なんですか。」と、お母さんは、おわかりになりませんでした。

「アカギタニタニタニって?」

「あああれですか、はさみ、ほうちよう、かみそりとぎという、とき屋さんですよ。」と、お母さんはお笑いになりました。

「私の持つている、はさみといでもらっている。」と、お姉さんがききました。

このときの、アカギタニタニタニがいつまでもお家の笑い話の種となりました。

「ほら、アカギタニタニタニがきましたよ。」と、とき屋さんが、まわってくると、お母さんが笑っておっしゃいました。それからいくたびこのはさみは、とき屋さんの手にかかっただけです。

お姉さんは、女学校を卒業なさると、お針のけいこにいらつしやいました。そのときには、このはさみは、もう、そんな役にたたなかつたので、新しい、もつと大きなはさみをお求めになりました。そして、いままでのはさみは、平常、うちの人の使い用とされてしまいました。けれど、ちようど、英ちゃんの上の兄さんが、いたずら盛りであつて、このはさみで、ボール紙を切ったり、また竹などを切ったりしたのです。

けれど、はさみは、不平をいけませんでした。あるときは、縁台の上に置き忘れられたり、また冷たい石の上や、窓さきに置かれたままであったことがありました。そんなときは、さすがにさびしかつたのです。

「はやく、お家へはいらないと、知らぬ人につれられていってしまうがな。」と、星の光をながめて心細く思つたことがありました。

「また、はさみが見えませんが、どこへいったでしょう。」と、あくる朝、お母さんが、つめを切ろうとして、はさみが見つからないので、こうおっしゃいました。

「きのうまで、箱の中にはいつていたんですよ。また、太郎さんが使つて、どこかへ置き忘れたのでしよう。」

姉さんは、方々おさがしになりました。そして、子供たちが遊ぶご門の石の上に置いてあつたのを見つけなさいました。

「まあ、こんなところに置いてあつて、よく人に拾われなかつたこと。」

そういつて、お姉さんは、子供の時分からはさみをなつかしそうに、ごらんなさいました。すると、過ぎ去つた日の記憶がつきつきと目に浮かんできたのです。

「長くあるはさみね、だいじにしななければならぬわ。」

お姉さんは、なくならないように、赤いひもをはさみにおつけになりました。

しかし、はさみは、もう年をとって、たいした役にはたちませんでした。

「切れない、はさみだなあ。」と、太郎さんが、かんしゃくを起こして畳の上へ投げ出しても、はさみは自分の切れないのをよく知っていましたから、がまんをして、あきらめていたのであります。そしてこのごろは、げたの鼻緒を立てたり、つめを切ったりするときだけにしか使われなかつたけれど、年とつたはさみは、若いころ、お嬢さんが人形の着物をつくるときに、美しい千代紙や、折り紙を切ったり、また、お母さんが、お仕事をなさるときに使われた、いくつかの華やかな思い出を目に浮かべて、せめてものなぐさめとしていたのでした。

あるときのことです。いつもの、とき屋さんがやってくると、

「アカギタニタニタニがきた、はさみといでもらうていいでしょう。」と、太郎さんは、お母さんにいいました。とき屋さんのことを、いつか、アカギタニタニタニとしてしまったのでした。

お母さんが、いいとおっしゃったので、とき屋さんにたのむと、おじいさんは、しみじみとはさみをながめて、

「もう、古ふるくなって、腰こしがよくなりましたから、といでもそう切れませんよ。」とい  
ました。人にんげん間おなと同じように、はさみの腰こしがまがって、よわってしまったのでした。

ちようどその時じぶん分、いちばん小さい英えいちゃんちいが学がっこう校あに上あがりました。そして学がっこう校あで  
手しゅこう工こうにはさみがいることになりました。

「英えいちゃんかあが持もつていくのに、ちようどあぶなくなくてこのはさみがいいでしょう。」と、  
お母かあさんが、赤あかいひものついでに、はさみをお出だしになりました。

はさみはまた筆ふで入れなの中なかにいれられて、その後英ごえいちゃんのお供ともをすることにしました。  
お家うちの人はこのはさみならとみんな安あんしん心しんしていました。なんでもすべて古ふるくからのもの  
には、ここうした愛あいと安あんしん心しんと親したしみがあるものです。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「古《ふる》いはさみ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2011年12月1日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 古いはさみ

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>